

外部との連携を強化してはどうでしょう？

情報セキュリティ大学院大学名誉教授
JNSA 会長 田中 英彦



現在のJNSAの活動を俯瞰してみると、セキュリティに関わる諸活動がある。諸規格立案への対応、ユーザに対するセミナーや技術紹介、製品やサービスの普及促進や市場活性化、セキュリティコンテスト、出版、人材育成、勉強会、教育指針作成、関連統計データ調査、諸ガイドライン作成、人材キャリア認定、メンバや海外市場開拓等、多くの活動がある。

これらは、セキュリティ企業が共通に持つ課題で、競争するより協力しあった方が良い課題に関わる活動で、それに興味を持つ者が参加しボトムアップで構成されるというのが基本であろうか。

しかし、新技術等の研究開発は共同の活動としては見えない。一般的に言えば、新アイデアは企業の活動を支える要素で、他企業との差別化を図る重要な考えであって、共有するものではない。しかしながら、一社で行うにはコストが高いテーマや、基礎研究のように競争前活動として一般に捉えられる領域、そこにおける相互協力は一般の技術世界では広く存在するもので、研究機関や大学などとの連携もその辺りに位置付けられる。

JNSA内でこの種の連携は今迄、限られた形でしか成されてこなかったように思う。連携の例は、大学生への教育活動として幾つかの大学で行われているセキュリティ教育enPiT-Securityや、岡山理科大での講義、そしてインターンシップ活動である。これらはいずれも専門教育を提供する活動で、若い人材を獲得するための間接活動でもある。

しかし、新しい技術の検討や共同研究活動で、研究所や大学と明示的に連携するものは見え難い。個別の企業内で具体的な共同研究がなされているかも知れないが、JNSA全体の明示的な活動としては存在しないのが現状である。

一方、大学の研究活動は、暗号等の基礎ではしっかりした長い活動があるし、研究機関では、MWSマルウェア対策研究人材育成ワークショップによる観測データの提供があり、研究所NICT、NII等の研究も存在する。研究会としては、ISEC、CSEC、ICSS、等があり、大会としては暗号と情報セキュリティシンポジウム SCISがある。しかし、これらの活動はセキュリティの実務専門家と疎遠で、JNSAとの具体的な連携活動も見えないように思う。

この状況は二つの意味で損失である。一つは、セキュリティ業界の抱える問題を解決するための知恵を相談する相手を見逃していることで、せっかく存在する研究機関や大学の力を生かしてきていない。もう一つは、セキュリティ業界が実務に携わる中で把握しているセキュリティ問題の現状や構造を、研究機関や大学へ明確に伝えていないことである。結果として、彼らがこの分野のオリジナルで優れた成果を出す助力をしておらず、その機会を与えていない。これらはセキュリティ業界の飯のタネに関わる事柄であって、外部に対してもっとオープンになり彼ら

の力を借りると同時に、今後の長期的な展望を描いて新方向を打ち出し、海外をリードするために必要なポイントではなからうか。

困っていることやニーズを伝えれば多くの研究活動を誘発する可能性がある。我が国のセキュリティ技術はオリジナルが少ないと言う前に、自分たちは十分その研究開発に努力してきたかを聞きたい。研究所や大学、そして若者にはセキュリティ技術や業界に興味を持つ多くの隠れた人財が居るように思う。これらの中に具体的な活動や連携のネットワークを形成できれば種々の動きが期待できよう。

ITシステムは次々と新たに作られ現場に投入される。新たな脆弱性が次々と作られる訳で、終わりが無いように見える。またシステムの一部として人間が騙される詐欺行為は防ぐのが困難に見える。しかし、これらへの基本対策手法を研究開発して実装し、セキュリティを追い詰めてゆくことも考えられるのではないか。

DXが声高に語られる今日、今後のIT業界が大きく育ちその役割をきちんと果たすためにも、セキュリティの役割は大きい。そのコアを他国に任せることでは済まされない。セキュリティはインテリジェンスに繋がり、自国の力が無いと他国の力を借りることもできない。我が国特有の環境があるのであれば、それは我が国の中でこそ解決が図れるし、それと似た環境を有する国へのセキュリティ提供は、我々の得意分野にもなる。

セキュリティの基本問題と脆弱性の構造を分析して共有し、その解決に向けた長期の活動に繋げ、結果としてセキュリティ企業のベースを高度化してゆくために、研究機関や大学等外部の人々との継続的な強い連携を図ることが必要なのではないかと考える。